

Top Interview

水城卓哉 / 貞松・浜田バレエ団

「今できることにしっかり取り組んで
発信してゆきたい」

2023' Feb Vol.91

Dancers Web トップインタビュー



『劇作リサイタル32 四つねの黒のアリス』
撮影：岡村昌夫（テス大阪）

2023' 2 DancersWeb

トップインタビュー

水城卓哉 / 貞松・浜田バレエ団

「今できることにしっかり取り組んで発信してゆきたい」

2021年第27回の中川鋭之助賞を受賞した、貞松・浜田バレエ団のダンサー・水城卓哉。新進気鋭の洋舞界の若手ダンサー1名に贈られる賞で、「端正なスタイル、ソフトで正確な動きで、古典バレエの主演に必要な条件をそなえている」と高く評価された。貞松・浜田バレエ団は、レーゲンスブルク歌劇場ダンスカンパニーの元監督・森優貴を輩出していることでも知られており、同氏の創作作品も多く発表している。

2023年2月に上演されるオハッド・ナハリン振付「Kamuyot」への思いと、これまでのバレエダンサーライフについて、じっくり振り返っていただいた。

[Read More](#)

—2007年に貞松・浜田バレエ団に入団されてから、16年目になりますね。

僕は運が良かったと思います。バレエ団を紹介していただいてそのまま入団が決まり、公演の役も結構早めにいただけて、トントン拍子に運びました。

—バレエをはじめる前は体操教室に通われていたそうですが、ご自分のご希望だったのでしょうか？

4, 5歳ぐらいだったと思うのですが、覚えていない(笑)。

—10歳で初舞台を経験されています。突然代役を務められそうですが、緊張感はありましたか？

何もわかっていなかったのが緊張感はなかったですね。妹がバレエを習っていたんですが、出演するはずだった男の子の代役を探していることを両親が知って、『ウチの子います』と言ったらしいです(笑)。

—まったくバレエを習っていなかったのに、すんなり順応できるのはすごいですね。

両親にスタジオに連れて行かれて、『あ、今日はコレをやるのか』って心の中で思っていました。

—いきなり舞台に立つことに、抵抗はなかったんですか？

基本的に受け身タイプなので(笑)。何も分からず舞台に立ちましたが、舞台直後は、やることはやったぞ！と思いました。

—何も分からないままに、でもちゃんと振付を覚えて10歳ですごいですね。何かご褒美はあったんですか(笑)？

そういえば、特になかったかも(笑)。

—それ以降、どのぐらいの頻度でバレエ教室に通われたのでしょうか？

最初は週2回ぐらいで、中学生になって週に3, 4回。こじんまりしたアットホームなお教室だったんですが、テクニクが少しずつ付くようになって、高校生になってから、もっとバレエが好きになりましたね。

—学生時代、ほかの部活をされていましたか？

部活は入りませんでした。僕はどちらかというとインドアタイプで、バレエ以外はゲームに熱中していましたね。

—観客として見た公演で、もっとも印象に残っている舞台はありますか？

本当にこれは巋眞目ではなく、貞松・浜田バレエ団の『くるみ割り人形』です。

僕のバレエ団の『くるみ』は、「お伽の国」と「お菓子の国」の2つのヴァージョンがあって、特に「お菓子の国」が僕は好きですね。舞台のダンサーたちの一体感やお客さんの雰囲気がとても良かった。

—これまで出演した舞台の中で、一番忘れられない舞台はありますか？

2018年に主演した貞松・浜田バレエ団『白鳥の湖』の王子役です。主演は『くるみ割り人形』でも踊らせてもらっていましたが、『白鳥』は、シングルキャストでの主役だったので、『くるみ』のダブルキャストのときとでは、心構えが少し違いましたね。

プレッシャー半分、楽しもうというフィーリング半分。「やってやるぞ！」と強い気持ちを持って挑みました。

—終演直後は、どんな感情を抱きましたか？

「終わったー！」(笑)。まずは、ホッとしましたね。すごく楽しめました。でも、悔しかったところ、良かったところもあって色々な思いが沸きました。

—ターニングポイントとなった出演舞台はありますか？

ひとつの舞台を挙げるのは難しいですが、2020年からコロナ禍で多くのバレエ団の舞台が中止になり、僕のバレエ団も3月の舞台は無観客になりました。

それ以外は、全部の公演が実施できたんです。すごくラッキーだったと思います。僕たちはやはり、舞台あつてのダンサーだから、観て来てくれる皆さんへの感謝の気持ちが前よりも強くなりました。

バレエダンサーは高いテクニックを見せることも大切ですが、それにプラスして、皆さんに伝えたい思いがもっと深くなりました。

—バレエダンサーとして、苦しかった時期を経験されたことはありますか？

僕はもともと運動が大好きですし、器用なタイプだと思います。“カン”でいくタイプかな(笑)。なので、最初はグーンと伸びる。でも次の段階で上に行けない。このまま現状維持で自分を甘やかしているのか、と葛藤するときはあります。

—これまでの人生で、もっとも大きな決断だったことといえば？

やはり貞松・浜田バレエ団の入団です。みんなとても仲が良く雰囲気もあたたかく、入団させてもらったことは本当にありがたいと思っています。

今振り返ると、バレエ団が受け入れてくれていなかったら、一般企業のサラリーマンになっていたかもしれない。バレエを天職とまでは思っていないんですが、やはりバレエが合っているのかな、と感じます。

—2021年に、第27回中川鋭之助賞を受賞されています。そのときはどう思われましたか？

「なんで僕？」(笑)。真ん中を踊らせてもらって、それに応えられるように努力はしていますが、プリンシパルとしてまだふさわしい人間ではないという思いがあるので、受賞はまったく想像していなかった。自分にはまだ足りないところがたくさんあるので、これでハードルが上がりましたね(笑)。

ただそれと同時に、今まで自分がしてきたことを見て下さっている人がいて、それは本当にありがたいと思っています。

—2018年にオハッド・ナハリン振付『DANCE』に出演されています。彼の作品を踊ってみて、当時の率直な感想は？

シンプルに運動量が多くてすごく大変でした。人間の本能にフォーカスしたような、精神性も強く感じ、自由に型にハマっていない。身体の中のエネルギーを放出するという感覚がありました。

—現在、「Kamuyot」のリハーサル真っ最中だと思いますが、どんな舞台になりそうでしょうか？

展示スペースに客席を置いて踊ります。舞台を囲むように360度に客席がある。イメージ的には美術館の展示室のような感じで、ダンサーたちは舞台袖に入らないんです。1時間ぐらいずっと出ずっぱりです。

隠れる場所もないし、360度見られる緊張感もあって大変だと思いますが、めちゃくちゃ面白い舞台になると思います。

—ダンサーとして、今後挑戦されたいことをお聞かせください。

僕は基本、受け身タイプなので(笑)、先のことを考えるよりも、目の前の舞台に集中してゆきたい。今できることにしっかり取り組んで発信してゆきたいと思っています。

オハッド・ナハリン振付「Kamuyot」(日本初演)

2023年2月25日(土)、26日(日) デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO ホール

<http://sadamatsu-hamada.fem.jp/schedule/recital34.html>

【水城卓哉／プロフィール】

2007年貞松・浜田バレエ団入団。

古典作品では「白鳥の湖」や「くるみ割り人形」などで主演を務める。他には「ロミオとジュリエット」でベンヴォーリオ役など作品により様々な役を踊る。

創作ではイリ・キリアン振付「Petite Mort」「6 DANCES」ジョージ・バランシン振付「アレグロ・ブリランテ」「セレナーデ」、オハッド・ナハリン振付「DANCE」、森 優貴 振付「死の島」「黒い雨」などの作品に出演。

2013年 新国立劇場 地域招聘公演「くるみ割り人形」全幕で主演。

2017年 NHK 主催「バレエの饗宴」で 森優貴 振付「死の島」にて出演。

2011年,13年,14年,15年こうべ全国洋舞コンクール 男性シニアの部 第2位。

<http://sadamatsu-hamada.fem.jp/prof/MizukiTakuya.shtml>